

春燈

六月号

6

June 2008



安住 教の句

冬の沼何の杭とも知れず立つ

『歴日抄』昭和二十九年

この句『歴日抄』十一頁、三句中の一つ。

安住先生の、なにげない思いのお句ながら私の心にしみる。それは、波紋のようにやがて消え入るのではなく、読み返すうち、先生のおやさしい眼差しまで蘇らせてくれる。もともとこの杭は、などとは考えようとなさらない。そんな、当時五十八歳の先生がそこにいらっしやる…。

山内 四郎

安住 敦の句

懸想文といふ韻事あり訪ふべしや

「春燈」昭和六十二年

昭和六十一年度の春燈賞を受賞された橋爪隆さんの特別作品発表についての助言の句である。懸想文と言う季語は、最近の歳時記には載っているものが少ないが、敦先生も隆さんも古来の日本の風俗、行事などに強い愛情を持ち、造詣の深いことで共通のところがあるようだ。この雅びな催事を是非調べて見たら良い作品への手掛りを得られるかもよとの弟子への優しい心遣いが思われる。

小張 昭一

燈下集

鈴木榮子

草踏んで足裏やはらかしぬくし

成型医院へ差入カットパイナップル

白飯に公魚あと引き切りもなし

ネーブル柑手剥のつゆを滴らす

青林檎インド林檎の懐しや



吉備おぼろ

白神知恵子

お礼参りの人と道づれ梅日和
天平のうつり香まとふ梅見坂
佐保姫の丹精成りし吉備野かな
野仏の風化せし耳春疾風
尼寺跡の早蕨にひざまづきにけり
切株も仏に見えし吉備おぼろ
居残りし鴨かひがひし宮の濠
鷹鳩と化し伸びやかに木堂像
万愚節巫女に道問ふ遊女墓
独り笑ひ恠へ柳絮をとばしけり

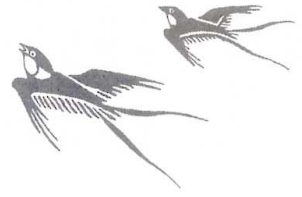
深川地ビール

長谷川歌子

ハープめく橋風の奏づる春の歌
露店の犬皆に撫でらる仏生会
貌鳥や「鶯の糞」吹聴す
飛石の子のドレミアソ芝青む
飛石に誘はれたる蝌蚪の国
水に沿ひ水を離れて青き踏む
飛花落花廃れし川を包みけり
深川地ビールお披露目の旗翻る
相撲部屋厚き俎干して初夏
呉服屋に売らるる雪駄祭来る

当 月 集

鈴木 榮子選



○ 神山志堂

街うらら品より値札目立たせて

老の春請けて地藏の虫封じ

さへづりや本因坊に石の供花

柳の芽雲水歩みつつ眠る

買はむとてただす浅蜷の氏素姓

○ 後藤眞由美

四不^{しふぞう}像を馭すや天ゆく春の夢

竜天に置き土産なるざんざ降り

峰走りてふ櫛の芽吹きや神の山

菜の花の化身案内す疎水道

暮出でて一手の置き処思案かな

○ 久本久美子

観音の御肩拭ふ春の水

暮れ方の墓前に清し梅一枝

染井てふ花のふるさとこのあたり

黄沙来て雀色時早めけり

蜂飛ぶや太郎のオブジェ鋭き目（岡本太郎記念館）

○ 石川龍士

引鳥の旅の訓練空と湖

鳥帰る日の通りけり風迅し

霾くもり空に溶け入る沖つ鳥

平安を吾がものと知る春霞

卒業の日は親方の道具磨ぐ

○ 布村松景

伎芸天のおんに春の愁ひかな

宇治橋の真一文字や春の雨

杖で指す向かひの山の夕桜

杉苔に散らす古刹のさくらかな

春の色三面鏡に溢れけり

春燈の句

鈴木 榮子選

過疎の村励むや春の大根畑

四百祭五重の塔の花の寺(池上本門寺)

灌仏会しきりに尼僧行きつ来つ

末法を憂ふる半眼甘茶仏

春眠や死んでないかと妻が声

哲学の道にたけなは花の宴

寝たきりの母に見せむと花盗人

膝頭ゆるぶ蛙の目借時

花三分人出も三分の一日かな

花の雲千鳥ヶ淵へなだれぬし

三線の島唄聞こゆ花菴

旧仮名遣の遺書の展示に花万朵(靖国神社)

山笑ふ不覚をとりし口舌かな

陽炎を懼る焦土の記憶かな

治饗酒を酌む行きずりの赤提灯

花曇顔すつぼりと蒸しタオル

咲き満ちし花をそびらに芭蕉句碑

東京 山川 好美

京都 懸林喜代次

東京 佐藤 玲子

埼玉 鈴木 撫足

佐賀 鈴木 道

走り根につまづき歩む花見杖

藪につなぎし花のいのちなり

神鈴に一ひらほどけ紫木蓮

水に慣れ残りし鴨の有情なる

取り落す皿のひびきや目借時

桜鯛のころ半身は昆布縮に

マドンナを胸に棲まはせ春の月

花辛夷母校に建ちし安吾の碑

教へ子に肩たたかれし花菜道

花凌ぐ木々の芽吹や奥相摸

九十九折落ちて根に帰す椿かな

禅杖一閃僧堂の目借時

囀や一期一会のプロポーズ

佇みし佳人妖しき四月馬鹿

オカリナの乙女の小指花簪

長命寺さまの園丁垣手入れ

肩先を春の匂ひの風がゆく

東京 今井 弘雄

東京 土屋 光男

東京 相田 和泉

東京 赤羽 陽子



余言

鈴木 榮子

水に慣れ残りし鴨の有情なる

今井 弘雄

水に慣れるという比喩は、新しい土地や環境になれることを言います。それは一般的な解釈でこの句の場合、水に慣れるそのことを言っています。その池の水がこの鴨の好みなのでしょう。だから残り鴨として悠々居残りをたのんでいるのです。

作者はその現象面を捉えて詠っております。心のどこかで鴨の心情を推し計り、それもこの残り鴨の気持だと思つてます。

灌仏会しきりに尼僧行きつ来つ

山川 好美

朝まで続く浅蜷の独り言

辻 泰子

四月八日、釈迦の降誕を祝福する法要は四月初めの行事として知られています。仏生会するとき仏の産湯として、甘茶を誕生仏にそそぎます。それは寺々で見られますが、この句はその寺でしきりに尼僧が行き来しているということ、大寺であることが分かります。

行きつ、来つという纏めもすつきりとしていて、灌仏会の進行が察しられます。

浅蜷は生きている貝ですから、買うとボールにあけてなぜか刃物を入れていた気がします。私はそこまで出来ないで、鍋物を仕立てるときは小鍋を魚屋さんに持込んで、一人前の具を見つくるって貰い、鍋に入れて貰って家でガスにかけるだけにします。

老の春請けて地藏の虫封じ

神山 志堂

巢鴨のお地藏様（高岩寺）は年寄の原宿と一時言われていました。四の日は相変らず混んでいます。近いので夕方自転車で行き、境内の洗い観音のお体を洗って来ます。

卒業の日は親方の道具磨く

石川 龍士

親方の道具を磨いて卒業していったということは今にしては美談でしょう。頼まれてしたことでもないし、この卒業子の心掛けです。

師匠も弟子もそのことで心の絆が深まり、技が伝わって行くのでしょう。弟子にとっては心からのご恩返しであり、親方にとっては何よりも嬉しい贈り物です。

百万遍の言葉より一研ぎの道具磨きでしょう。

墓出でて一手の置き処思案かな

後藤眞由美

さて時を待って出て来た墓は四足の前の一足か一手をおもむろに下す。どこへ置こうかと思案しているという句で

しよう。思案の一手という構えがこと墓の手足以上に意味と意志を持つ大事な一手であることを暗示させます。

（以下略）

